

## 第十一講 花粉から見たギリシア史—人研の経済活動と自然環境—

### 4つのフェーズ

#### (1) 6700bp (4700bc) : 新石器時代後期

開放的ナラ林が丘陵部の傾斜面に広がる

イネ科花粉の鋸歯状の動き→海面上昇を示す

小規模な農業活動と開拓

ナラ林の広がる丘陵部傾斜面での腐食土地帯での経済活動

#### (2) 4500bp (2500bc) : 前期青銅器時代後期

活発な開拓と経済活動

ナラの減少：ナラ林の伐採と開拓

ゲンゲの急増：森林中での人間の集中的な経済活動

イネ科・オオバコ（ヘラオオバコ）・ヤマアイ：強く表れる

牧畜と農耕の活発な活動

自然破壊に伴う大規模かつ広範囲な土砂崩れを引き起こす



この地域の経済に大きな打撃を与える

棚田利用の改善を結果（オリーブを畑の中に植える）

#### (3) 3200bp (1200bp) : 後期青銅器時代末期

ミケーネ文明の崩壊につながる現象がみられるのではないかと注目

イネ科花粉の急激な減少・オオバコ（ヘラオオバコ）の減少・ヤマアイの減少

→牧畜や農耕活動の低下

ナラの一時的回復：人間の自然環境への圧力軽減

経済の下降局面を示す。

物資不足を結果

（ピュロスなどでは宮殿は物資不足に備えて倉庫群が造られる）

#### 3200bp (1200bc) 以降

ナラの急速な減少

トルコガシの急増

→植生の急激な劣化

ニレの急増→過剰な牧畜

オリーブの急増→オリーブ栽培の拡大

→マッキの食性の拡大

ブドウ花粉の出現→ブドウ栽培の拡大  
マツの侵入

#### (4) 現在

ナラ消滅の危機

マッキの植生が非常に強く表れている

イネ科やオオバコが強く表れている

→過剰な牧畜による自然破壊

特にヤギの食害の問題

#### 6700年の歴史

花粉という文字によらないテキストを用いて南部ギリシアの一つの地域の 6700 年に渡る歴史を概観した。

人間の経済活動が自然環境に及ぼしてきた影響を植生の変化（劣化）に見て取ることができる。

鉄器時代に入ってこの地域の人間の経済活動は非常に活発化しており、そのことが植生の顕著な劣化を結果している。

マツが長期にわたって非常に強く表れていることは環境に対する人間の経済活動の圧力が恒常的に続いてきたことを推定させる。